

担癌患者における direct oral anticoagulants (DOACs) による脳卒中二次予防

Secondary prevention for stroke in cancer patients using DOACs

脳血管研究所美原記念病院 脳卒中部門¹

医療情報部²、医療管理部³、神経内科⁴

神澤 孝夫¹, 片野 雄大¹, 佐藤 麻美², 小林 真里子³, 美原 盤⁴

【目的】人口の高齢化により、癌、脳卒中、さらに心房細動を有する患者は今後も増加すると見込まれるが、近年、いずれの疾患も併存する患者に遭遇する。非弁膜症性心房細動に対する脳卒中の1, 2次予防においてDOACsの有効性、安全性は確立されているが、担癌患者におけるDOACsによる脳卒中二次予防に関しては明らかでない。

【方法】当院において平成23年3月から平成27年11月現在まで、DOACを使用した553例から癌患者を抽出し、脳卒中2次予防において、有効性、安全性を後ろ向きに検討した。

【結果】553例中、癌を併存した症例は28例であった。うち5例は、終末期癌でトルソー症候群を呈し、DOACsは使用されたが、4例で中止となり、30日以内に死亡していた。がん治療の適応となった患者は23例で、平均年齢は74.7±7.6、男性は51.7%であった。癌の種類は、肺がん(6例)、消化管癌(4例)、前立腺癌(4例)、肝胆膵癌(3例)、その他(6例)の順であった。がん診断時のクレアチニン・クリアランスは63.3±17.6ml/minで、貧血の進行(Hb値で、前値と平均1.43±1.68g/dlの低下)を認めた。APTTまたはPTの延長により容量減量した症例は13.8%であった。観血的手技により一時中止となった症例は51.7%、手術は37%に、化学療法は51.7%に施行された。観察期間中(中央値:375日、IQR:118-814)の虚血性脳卒中発症率:0%、頭蓋内出血:0%、大出血:4.3%(血尿:膀胱がん)、死亡率:20.7%(すべて癌死)であった。

【結論】DOACsは、がん治療の適応となった患者において、有効性と安全性が示唆された。DOACsの薬物動態、代謝、排泄、抗がん剤との相互作用などの特性は癌治療においてメリットがあると思われる。